

島津義久による国分の都市建設

—ライフステージと信仰に着目した考察—

河原 洋子¹

¹ 第一工業大学 准教授 (〒899-4395 鹿児島県霧島市国分中央 1-10-2)

E-mail: y-kawahara@daiichi-koudai.ac.jp

Town construction in Kokubu by Yoshihisa Shimazu

—Consideration from the life stage and faith of Yoshihisa Shimazu—

Yoko Kawahara¹

¹ Associated professor, Daiichi Institute of Technology

(1-10-2 Kokubuchuo, Kirishima, Kagoshima, 899-4395, Japan)

Abstract: Yoshihisa Shimazu was the one of famous generals in the last 16th century in south Kyusyu. He constructed Kokubu town in about his 70 years old; and lived in Kokubu till the end of his life. The reasons why he selected Kokubu for his new place or how he planned Kokubu town are not still clear. In this paper the author focused on his age and health condition when he prepared to move to Kokubu. From some historical records and comparison to current Kokubu town, the idea is shown that Yoshihisa thought Kokubu was the good place for his aging. And he constructed two temples near his house. Though the site of Yoshihisa's house is used as school and all temples including the two temples above were destroyed in the beginning of Meiji period in Kagoshima prefecture, for example the position of the straight road; where the Yoshihisa's house and the two temples were facing; have not changed. This paper also shows the idea that the road above was the basic axis for the planning of Kokubu town by Yoshihisa. We can imagine the Yoshihisa's life and faith from current Kokubu town.

Key words : Kokubu, Yoshihisa Shimazu , early modern times, temple

1. はじめに

薩摩藩には100カ所以上の麓(ふもと)と呼ばれた武家集住地があった。その中で近世に建設された都市として、最も初期の、且つ大規模な麓の一つが国分である。国分麓の起りは、島津家16代当主・義久(1533~1611年)が最後に行った都市建設である。

義久は三州(薩摩・大隅・日向)を統一し、

九州の大半を平定したが、天正15年(1587年)に泰平寺(薩摩川内市)で豊臣秀吉の九州討伐に降伏し剃髪して龍伯と号した。しかしその後も三州領国の支配の実権を握っていたと考えられており¹、全国的にも名高い武将である。

義久は、鹿児島の内城(鹿児島市大竜町)、住吉の富隈城(霧島市隼人町住吉)から、慶長9年11月(1605年)に国分へ移ったとされる。

義久の住まいは現在の国分小学校（霧島市国分中央二丁目）の敷地で、そこは義久の終の棲家となった。国分小学校の南の道路沿いには、そこを「舞鶴城跡」と呼ぶ石碑が建てられている²。

義久の住まいについては、直臣等により書き写された『国分諸古記』の「龍伯様国府麓御屋形跡」と題する箇所にある絵図によって、敷地や周囲の様子が分かる³（以下、義久の国分の住まいを「屋形」とする）。屋形の背後には新城と呼ばれた山城が、南側には城下町が広がっていた。新城の本丸は現在の城山公園（霧島市国分上小川）である。なお、国分でも義久は龍伯の名で通っていたが、本稿では義久のまま呼ぶこととする⁴。

近世の国分の街が描かれた主な古絵図としては、義久が住んでいた慶長の頃が描かれた「国府衆中屋敷配置図」と題する絵図⁵（以下、「慶長の絵図」とする）、及び天保に作成され島津藩が幕府に提出した絵図があり⁶（以下、「天保の絵図」とする）、どちらも東西・南北方向に直線状の道を表す線が引かれている。これらの絵図に見られる格子状の道の形が、現代の道路の位置と似ている範囲は、北は国分小学校、東は鐘突公民館、南は正覚寺公園の辺りを通る道路と、西は鹿児島県道 60 号国分霧島線で囲われた矩形の内、義久が暮らした頃を含む近世の街の中心部もその辺りと考えられる⁷。

しかし、義久が移転先に国分を選んだ理由や都市構造の詳細についてはよく分かっていない。

一般に義久の国分移転の背景は、慶長 5 年（1600 年）の関ヶ原の戦い以降の徳川家康への対応や島津家内の実権など政治的な義久の立場から考察・推測されている。それらは義久の経歴からは自然であり、重要な一面であろうが、本稿では視点を変え、国分移転の時期は義久の人生の晩年にあたること、及び信仰に着目する。義久が晩年に詠んだ和歌を考察に用いるなどして多角的に仮説を提示し、適宜関連する歴史を交え、国分の都市の建設背景と特徴を述べる。

十分な根拠を示すことは難しく、用いる史料・着眼点により解釈は異なるかもしれない。しかし、その研究の蓄積と多様さが都市のストーリーを豊かにすると考える。

2. 研究の方法と本稿の流れ

本稿では、活字化され、郷土誌等でよく取り上げられている史料を参照して論を進める。先行研究の蓄積の中に本研究を位置付けるためである。また、重点的な考察・現地調査の場所を富隈城や国分麓が位置した国分平野とした。

信仰と都市を関連付けて考えるには、一般に寺社を扱うことになるが、明治初めの鹿児島県の徹底した廃仏毀釈のため県内の寺院は全て廃寺となり、国分でも寺院の主な痕跡は破壊された石像や墓地の一部のみである。

そこで筆者らは、先行研究から国分平野とその周辺にあった寺院をリストアップし、薩摩藩により編纂され領内の名勝等の説明文と絵図がある『三国名勝図会』⁸、領内の寺社の由緒・関係文書・歴代住職名等が書かれた『寺社調』⁹、及び『国分諸古記』における各寺院の箇所を抜き出し整理し、現地調査を行った¹⁰。本研究ではその成果を参考にした。

本稿の流れとしては、次章以降を義久の国分移転の前後に分け、できるだけ年を追って述べる。まず、富隈城を居城としていた時期、次に、国分移転後について寺院を中心とする。

3. 義久が富隈城を居城としていた時期

(1) 国分への移転の準備と国分の地形

富隈城から国分への移転について記された史料としては、南浦文之（1555～1620 年）の文章を集めた『南浦文集』の「国分新府記」と題する記録がある¹¹。

「国分新府記」によると、慶長 6 年夏（1601 年）に義久は国分に都を営もうと欲し、慶長 9 年 8 月（1604 年）に家臣を京都の陰陽博士のもとに派遣して、国分の土地の吉凶を判断させた。

陰陽博士は鎮地鎮宅の秘法を修し、義久の健康と長寿を祈った。そして南浦は新しい街を觀て、東西に9、南北に5の道は、陰陽五行をかたどるものと思った¹²。つまり、易の考え方に照らしても良好な街がつけられたのである。

この時期は、関ヶ原の戦いで西軍についた島津家が窮地に陥っていた頃であった。家康は義久に上洛を求めたが、義久が応じないまま、慶長7年(1602年)に家康より所領安堵の書状が与えられた。義久の代わりに甥の忠恒(1578~1638年)¹³が上洛していたが、義久は島津家の所領を守り抜いた人物として知られている。

国分では、北と東には山々が街を囲むように位置し、義久が住んでいた頃は大津川(又は広瀬川)が街の南を横切り鹿児島湾に注いでいた。万が一戦になったときには、外敵の侵入から守りやすい地形であった。街の立地は「四神相応の地」の考え方にも適っていた¹⁴。

それから半世紀ほどして大津川の流は現在の天降川に移されたため、義久が見た光景を想像することは難しい。しかし、大津川の存在は国分の都市建設の背景として重要である。

国分においては霧島山麓の水は川となり、シラスの山は水を含み水源になる。唐人町の地名は、大津川を利用して明との交易が行なわれたことを伝える。このように、水という点でも優れていたことは、国分が富隈城からの移転地選ばれた重要な要因であり、街の特徴である。

ところで、龍伯の字を辞典で確認すると、伯は長兄を意味する。義久は島津家15代当主・貴久の四人の息子の長兄として家督を継ぎ、家の秩序を維持し続けた。そして龍は雲を呼び雨を降らす想像上の動物である。義久も龍のように水とつながっていたのではないか。

慶長16年正月21日、義久は国分で亡くなった。以下の辞世の句(龍伯公御逝去御歌)でも「水」が取り上げられている。

「世中の米と水とをのミつくし つくして
後は天津大空」

(2) 島津義久いろは歌とライフステージ

戦国武将は能、和歌、茶の湯を修練し、交渉等に利用しており、義久が特に重視したのは和歌であった。

ここでは、富隈城に居城していた頃の義久の心情を表す史料として、「伊呂波歌」と題する義久が詠んだ一連の和歌を取り上げる。歌の最初の文字をいろは順にして連ね、そのあとに一から十を書き出しにする歌が続いている(以下、「島津義久いろは歌」とする)¹⁵。引用した歌には順に番号を設けた。それらの歌はいろは順ではなく、筆者が文脈に応じて並べた。訳の出典については上注を参照していただきたい。

まず、奥書を見る。

「此いろは歌五十八首は、慶長七年正月廿三夜月待の目さましに詠之、頓作と云、老耄といひ、ひかことあらん所、みゆるし給ふへきもの也、」

(訳：此のいろは歌五十八首は、慶長七年正月二十三夜、月待ちの目さましに詠んだものである。俄か作りであり、老いぼれた身の作である。見苦しいところがあったらお赦しいただきたい。)

旧暦1月23日の月待ちは宗教的な儀式とも宴会とも考えられる。慶長7年(1602年)とあるが、月日からは家康から所領安堵を受けることを知らない時点であった可能性が高い。また、これらの歌は後日推敲されたと思われるが、奥書では、眠気覚ましとして急いで詠んだことを断っており、その分義久の本心を読み取ることができるのではないか。

58首には、武将としての心構えや家臣に伝えたいこと、神仏や学問に対する向き合い方等が詠まれている。これらの多くは、自らの経験を踏まえて導いた、義久の価値観の証拠として重要である。

人の一生のある傾向を持った段階をライフステージという。その区切り方は時代を反映したプロトタイプがあるだろうが、個人としては、特に高齢になると健康状態が強く影響する。

義久の、自身の年齢に対する心境を察するこ

とのできる三首（歌1～3）を挙げる。

歌1）餘所にみてうらめしかりし老らくの 我
いただきにつもるしら雪（訳：年配の人の真っ白な頭
を人ごとのように見ていたが、いつしか自分がそんな年にな
ってしまっている。）

歌2）六十にあまらはたれもこころせよ 時に
あふまし今のよの中（訳：六十を過ぎたら誰も心せよ
生きた時代が違うよ今の世の中。）

歌3）十をななつかさねてけふもはや む月の
二十三夜なりけり（訳：十年を七つ重ねて七十、その七
十歳になって今日は早くも一月の二十三夜であるよ。）

現代の日本では65歳以上を高齢者、75歳以上を後期高齢者とする定義が一般的で、その年齢を意識する中高年は多いだろう。今から400年ほど前、当時70歳であった義久の心身には現代と同じような時間軸があったことが分かる。

少し遡って、義久が富隈城に移ったのは文禄4年9月（1595年）とされる。その翌年、坊津や鹿児島に配流されていた公家・近衛信尹（1565～1614年）¹⁶が京都に戻る途中に、富隈城にほど近い濱ノ市の港に寄った。信尹の日記によると、信尹はそこで4泊5日を過ごし、義久のところでは和歌会が開かれ、集まった家臣等が能を舞うなどした¹⁷。

この史料の記述で注目させられたのは、濱ノ市で船が見送られた数日後に、義久も信尹が次に向かった庄内（宮崎県都城市庄内町）まで行って、そこでの酒宴や能舞に再び参加したことである。当時信尹は30代初め、義久は60代中頃で、義久の行動は信尹との年齢差を感じさせないほど活発だったと思われる。

一方、先の三首（歌1～3）を見ると、数年後の義久は自身の高齢化を強く意識していることが分かる。現代でも日本人の健康寿命は70代初めであるように、義久も健康面の衰えを感じたのかもしれない。それはライフステージを、例えば壮年期から晩年期など次の段階へ移させるであろう。

国分に移転した翌年、徳川家康は医師を派遣

し、上洛の求めに応じない義久の病気を確認している¹⁸。家康の要求にこたえなかったことは、義久の作戦とも言われているが、本当に体調に変化があり、高齢化もその要因で、国分に移った頃には病気の状態であったとも考えられる。

そのような時期に拠点を移す必要があったなら、心身の少ない負担で移転ができ、更に歳をとっても過ごしやすい土地を良いとするかもしれない。その結果、富隈城からわずか4キロほどの国分に、自身の屋形を北に置き、南の大津川に向かって緩やかに傾斜する場所に、コンパクトな城下町がつくられたと推測される。日常生活においても移動しやすかったであろう。

(3) 国分平野の寺社

義久が富隈城に居城していた頃の寺院の分布を見て注目させられたのは、富隈城より北に3kmほどの正八幡宮とその周辺、国分の屋形より北に4、5kmほどの台明寺と現在の重久地区に、特に寺社が集中していたことである。

① 正八幡宮エリア

正八幡宮は現在の鹿児島神宮で、延喜5年（972年）成立の『延喜式』では「鹿児島神社」と記され、平安時代後期には武家の守護神として広く信仰された八幡神が合祀された。明治7年、鹿児島神宮に改称されている¹⁹。

戦国時代の国分平野とその周辺では、清水や姫城等の山城が戦場であったが、正八幡宮も攻撃の対象であった。義久の父・貴久は、正八幡宮を救護し、再建には長い期間を要した²⁰。義久も当主となってから正八幡宮に社領を寄進しており、代々続く信仰を引き継いでいる。

16世紀末には正八幡宮の辺りにあった寺院の中で、跡地を確認できたものを挙げる²¹。初出する寺院名の後の括弧は『三国名勝図会』に記された創建年や宗派である。

正八幡宮の別当寺で正八幡宮と一体的な敷地にあった弥勒院（創建不明、天台宗）は、江戸時代も御免地の石高が特に多かった²²。鎌倉時代を創建とする正八幡宮の「本地所三箇寺」

き、東にも山々を見渡せた。それに対し富隈城は海岸線に更に近く、山並みは遠い。慣れ親しんだ内城の景観に近い、山の近くに屋形を設けられる国分を選んだことは十分考えられる。現代では、高齢者が住み慣れた場所・環境を維持することの重要性が指摘されている。義久は、そのような自身の居場所を街のスケールで実現させたようである。

(2)大隅国分寺より

国分小学校の南の道路の西端からそのまま西に数十mほど直進した対面に「国史跡・大隅国分寺跡」がある。発掘調査の出土遺物から、天平13年(741年)の聖武天皇による国分寺建立の詔勅による大隅国の国分寺(以下、「国分寺」とする)の跡とされた。

大隅国分寺跡の緑地部分は約50m四方で、年号が刻まれたものとしては、康治元年(1142年)の六重の石塔、及び永禄5年(1562年)と天正10年(1582年)の石碑が、敷地中央から西寄りに建っている。これらは、その当時、国分寺の再興・再造が目指されたことを示している。緑地の西の駐車場を隔てた道路は、近世は乗馬ができる広さの道で、豎馬場と呼ばれた。

図1は『三国名勝図会』の「国分寺」と題する絵図である²⁷。境内の中央に二人が描かれ、一人は法衣と坊主頭のため僧侶に見える。周囲には建物が4棟ほど描かれ、最も大きな建物には「観音堂」という名称が添えられている。他には四脚門、及び垣と樹木が描かれている。

説明文には「元禄四年(1691年)、州安といふ僧重興して、ここに居住す(略)今や寺は主僧一口の草庵なりといへども、廻國修行納経所となりて、参詣の徒絶ず」(括弧は筆者に依る)と書かれている。そして、康治元年の銘の五重の石塔があったことが書かれている。現在の石塔は六重であるが、上二段の石質や加工具合は他と異なり、以前は説明文のように五重だった可能性がある。また、石塔が観音堂の左に、薬師如来を安置した薬師堂が寺屋の側にあったこ

とも書かれているが、絵図と説明文から全体の配置や方角を推定するのは難しい。

大隅国分寺跡に関する他の史料としては、義久の家臣であった服部家の子孫による幕末のものと考えられている「服部日記」と呼ばれる古記録の中の「麓小路ノ図」と題する図がある²⁸。

この図には、道を表す線が引かれ、道の名称等が記されているが、大隅国分寺跡の南の狭い道路を表す線が見られ、「国分寺小路」と添えられている。そして、この図と天保の絵図を見比べると、天保の絵図にも国分寺小路の道を表す線が引かれている。しかし、慶長の絵図では、その辺りに「観音寺」と記され、その下(南)には家臣の名が記されており、国分寺小路を表す線はない。国分寺小路の名称は、後年に設けられた道に名付けられた国分寺の名残とも考えられる。また、これら3つを見比べると、大隅国分寺跡の北の道路を表す線は一致している。

つまり、慶長の頃の境内の正確な大きさは分からないが、大隅国分寺跡は観音寺と呼ばれた国分寺の跡であり、その北の道は、屋形の南の道の延長であった。この道は義久が移転する前から存在しており、この道を基準にして、屋形の南側に広がる城下町の格子状の道が決められたと推測できる。何度も再興されようとしたが果たされなかった国分寺であったが、信心深い義久が境内周囲の主要な道を新しい街の一部に取り入れなかったとは考え難いからである。



図1 三国名勝図会にある国分寺の絵図

は、正興寺（永仁年間、臨濟宗）、正国寺（由緒複数あり、律宗）、正高寺（貞和4年、真言宗）であった。これらは『三国名勝図会』に絵図がある。他には、宿坊として開基された正行寺（貞和2年、時衆宗）があった。

②台明寺と重久地区

台明寺は国分より北北東の郡田川沿いにあった。創建は不明とされているが、寺に収蔵された「台明寺文書」と呼ばれる古文書の中には、長久2年(1041年)のものも含まれており、国分周辺で最も古い寺院の一つであった。

島津家との関わりとしては、建仁3年(1203年)の文書によると、島津家初代忠久は上洛の間の無事を祈り、三間四面の本堂を造立した²³。『三国名勝図会』の説明文によると、貴久の時にも祈願があった。「日吉山王社」と題する絵図の右下に台明寺の境内の一部が描かれている。

その西側で手籠川が流れる重久地区には寺院が集中していた。跡地を確認できたものとしては、『三国名勝図会』に絵図がある念仏寺（弘安3年、時宗）の他に、慈恩寺（曹洞宗）、十聲寺（時衆宗）、乗林寺があった。

③義久は易や神仏に判断を委ねたのか

このように、国分平野の辺りには、古代を起源とする正八幡宮と台明寺を中心に、平安時代に広まった真言宗と鎌倉時代に島津氏が信仰した曹洞宗・時衆宗（時宗）等の寺院が集中する大きくは2つのエリアがあった。それらは島津家との繋がりが深く、義久が富隈城からの移転先を検討する目印となり、新たに建設される都市と重要な位置関係にあったに違いない。

義久は出陣をくじで決めた武将としても知られている²⁴。国分移転の場合も陰陽博士に尋ねており、神仏等に判断を委ねた人物と評されることがある。これについて、国分移転のことと島津義久いろは歌を重ね合わせて推測したい。

古典を参考にするなどして、自身の目で見て判断してきた経験と、それを重視する義久の評価基準が示されている三首（歌4～6）を挙げ

る。国分は義久が良く知る場所であり、根拠を持って移転地に決めていた上で、その良否を一種の専門家に確かめたように思われる。

歌4) 徒然なるおりおりことに古草紙 見てことハりに心つくへし (訳: することもなく時間に余裕のある時は何時でも古い書物を見てものの道理を理解しなさい。)

歌5) 推量ハおほかたあたふとおもへとも とときととからぬ心にそある (訳: 当て推量で大体は合っていると思うけれども、それはものを見る鋭さと心の中の穏やかさによるものだろう。)

歌6) みる事も又きくことも耳と目に とまらぬ人やたはけなるらむ²⁵ (訳: 人に聞いた話も自分が見たものも目にも耳にも残らない、そんな人を戯け者と言うのであろうか。)

4. 国分の都市構造

(1) 義久の屋形と新城

「はじめに」で述べた、義久の屋形の背後にあった新城と呼ばれた山城の詳細は、『国分諸古記』の中の「国分新城縄引帳」と題する史料から分かる。これは、義久没後90年ほど経った元禄12年(1699年)の日付が記された役人による測量調査の記録である。

史料の記述から、調査された時の新城は既に廃城であったことが分かるが、城として機能していた頃の道の大まかな位置を出すことができる²⁶。城山公園の山頂中心部に武家屋敷の痕跡があったことも分かる。また史料には、当時の屋敷地の区画割や道を表す線が引かれ、20の区画に義久の家臣の名が記入された図もあり、図と調査記録の道の形は似ている。

屋形の背後の山に、城の機能や武家屋敷があったことは、戦に備えるために国分が移転地に選ばれたという歴史解釈を支える。しかし、屋形と山城の位置関係から、居心地という点で推測することはできないだろうか。

義久の富隈城の前の居城であった内城は、島津家の菩提寺である福昌寺の裏手の山を北に置

(3) 義久が建立した寺院と信仰の軸

義久が国分の街に建立した寺院は2ヶ所あった。一つは義久の祈願所の金剛寺(慶長9年、真言宗)である。現在は「金剛寺跡」や公園と呼ばれ、国分小学校の南の道をそのまま東に直進し、100mほど坂を上ったつきあたりに位置する。この道は城山公園入口へ続いている。敷地には、義久の法名が刻まれた元和2年(1616年)建立の三重の石塔がある。他には真応上人が元禄5年(1697年)から亡くなった元禄11年まで籠った石室や種々の石碑や墓石がある。寺には義久の抜歯が納められていたと言われる²⁹。

『三国名勝図会』の金剛寺の箇所には、当初境内に正寿院など六つの坊があったと書かれている。現状を見ると平坦な敷地の背後に山が迫っており、金剛寺跡が境内であったとすれば、この建物数に対して狭い。しかし慶長の絵図には、「金剛寺」の下(南)には「本条坊」と記された区画があり、金剛寺跡だけでなく、周囲一帯が境内として扱われていたと考えられる。

写真1は、三重の石塔の正面から見える光景である。石塔の正面には樹木等があったため、その先に出て撮影した。眼下は下りの坂道なので、石塔は高台にあり、西の鹿児島神宮(正八幡宮)の方を向いている³⁰。

写真1の右に写っている道路は、国分小学校の南の道路(屋形の南の道)に続く。道幅の中心に、手前(金剛寺)から向こう(屋形)に向かう矢印を加えたが、道路の位置は三重の石塔の正面でなく北にずれている。石塔は、かつての屋形の南の道を右手(北)にして、屋形と国分の街の両方を見られる位置にある。

では、三重の石塔の位置はどのように決められたのだろうか。石塔の建立年からすると、義久没後に建てられたことになる。ここに抜歯が納められたと仮定すると、抜歯を所持し、石塔を建てることができたのは、義久と共に屋形で暮らした三女・亀寿が適当に思われる。もしそうであれば、石塔の位置も亀寿によって決めら

れたであろう。娘の住まいと国分の街を見守ることが意図されたのではないか。



写真1 金剛寺跡三重の石塔の正面前方から撮影

義久が建立したもう一つの寺院は、菩提所の龍昌寺(慶長10年、曹洞宗)である。『国分諸古記』の龍昌寺の箇所によると、龍昌寺の龍の字は龍伯の龍、昌は島津家の菩提寺である福昌寺の昌を取った。納戸衆が保管し、三世住持が納置した義久の御肉牙も安置されていた。

龍昌寺は現在の国分中央高等学校(霧島市国分中央一丁目)の辺りにあった。高校の背後には鼻面山(鼻連山)と呼ばれた小山があり、その山裾と中腹には「龍昌寺墓地」がある。そのような名称であるのに、龍昌寺のことはほとんど知られていない³¹。山の中腹の墓地には江戸時代の墓石が多数ある。鼻面山は一部削られたが第一工業大学敷地の南に残っている(写真2)。

上史料によると、龍昌寺には茅葺屋根の客殿や茶堂等の建物があった。また、建立当初の寺を山の頂上にあつたとする説が見られる。これらについては、高齢・病気の義久が参詣したとすれば、客殿等が山頂にあつては不便なので、山の下方にあつたと思われる。



写真2 鼻面山の現状を上空より撮影³²

義久の屋形、金剛寺や龍昌寺等の位置関係を大きく把握してみると（図2参照）、屋形の南の道の延長には、東は金剛寺、西は龍昌寺が位置し、西は正八幡宮の方を向いていた。そしてこの道に交わる県道60号は、正八幡宮と共に島津家から信仰された霧島社（霧島神宮）に向かう道の一部であった。現在、これらの道路の交差点よりすぐ北の緩やかな鳥越と呼ばれた峠の跡で、西側には義久の命により移設されたと伝わる若宮神社がある。今でも確認できる二本の軸線は義久の信仰を表すもので、この明快な構成は国分の都市の特徴である。

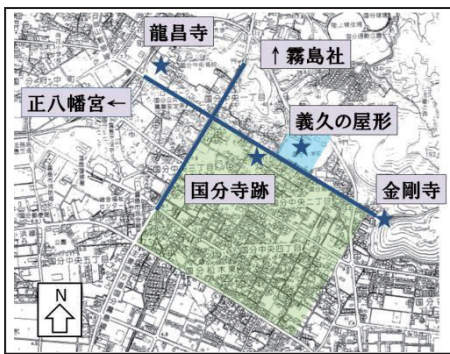


図2 屋形等の位置と義久の信仰の軸線³⁾

5. おわりに

島津義久が国分に都市を建設し、そこで過ごしたのは70代であった。国分では高齢の義久にとって過ごしやすい場所に、ふさわしい街が建設された。そして、義久の屋形の南の道は、中世・先代の島津家の信仰を受け継ぐ義久の信仰を表す軸線であり、国分の街を計画する基軸になったことを仮説として示した。

都市の歴史と言うのは、ある時期における道や土地利用の状況が描かれたレイヤーが積み重なり形成されたものとして理解することができる。義久がつくった都市構造は、その前後の時代を解明する上で重要なレイヤーとなる。

国分では近代の都市開発で歴史的な要素は見えにくく、保存に対する地元の機運は高くない。しかし、近世の道の位置、水の流れ、生垣や石垣、武家屋敷の形式等が良く残っている。

本稿は、一時期の、限定的な視点からの一考察であるが、研究対象の時代や人物を拡大し、また細部を見れば、より多様な都市のストーリーが生まれるであろう。まずは国分で過ごした島津義久の歴史が広く知られるようになり、現存しない寺院も含め、景観整備や国分特有の活用方法が生まれることが期待される。筆者は国分の街の景観は京都に通じると考えている。

義久が九州平定に向かわず、秀吉に降伏したことなど戦を避けた史実については今でも議論されている。真意はどうだったのか。

最後にその一案として、島津義久いろは歌より、国分の都市建設を含む種々の政治的判断の基とも思われる三首（歌7～9）を挙げたい。義久は戦国の世が変わることを認識し、家という範疇を超えた大きな日本の歴史の流れを大切にしていたと思われる。

歌7) ゆふなるをむかしハほめし今の世ハ

うつけたるとてわらハれやせん（訳：勇氣ある人を昔は褒めたものであったが、今の世の人からはうつけもの（戯者）として笑われるのではなからうか。）

歌8) むかしよりつたハリきたる道々を 絶えずつづけよすゑの世の人（訳：この日本に昔から伝わるそれぞれの道を、後世の人々もそれぞれの立場でいつまでも続けてほしい。）

歌9) いつまでも久しかるへき君が代を 猶よろづ代と守れ神かき（訳：何時までも長く続いてほしい帝のお治めになるこの世を、もっと長く続くように守ってください、神々よ。）

注)

¹ 国分郷土誌編纂委員会：国分郷土誌 上巻、国分市、1997

² 舞鶴城と呼ばれた理由や時期は明確ではない。富隈城・国分の頃の義久については以下の地元有志の研究がある。甲斐保之ほか編集・執筆：島津義久と国分・隼人、国分・隼人郷土史研究会、2004

³ 『国分諸古記』は以下にある。国分郷土誌編纂委員会：国分郷土誌 資料編、国分市、1997

⁴ 天正15年の豊臣秀吉への降伏以降、義久発給の文書の差出人の名の多くは龍伯であったが、義久の名も恐

らく意図的に使われていた。

⁵ 以下の文献によると「国府衆中屋敷配置図」は、初め慶長 15 年(1610)に作成され、「元禄十一年戊寅十一月改之、八十歳野村伊賀記」と記し写された絵図が複数写されている。本研究では、「明治二十一年七月三日国分衆中荒田武英(略)」と書かれたコピーで確認した。鹿児島県立埋蔵文化財センター：鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(21)本御内遺跡Ⅲ、鹿児島県立埋蔵文化財センター、p. 39、1997

⁶ 国分郷土誌(1997)の付録「隅州曾於郡国分郷絵図」。「東京大学史料編纂所蔵」と注釈がある。

⁷ 国分中心部の現在の街路網が江戸期の状況から殆ど変化していないことを示した研究は以下がある。揚村 固ほか：国分麓の歴史遺構とその成立 薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究-31、日本建築学会中国・九州支部研究報告、第 9 号、pp. 437-440、1993

⁸ 国会図書館デジタルライブラリーで公開。

⁹ 注 3 の書籍に旧国分市域の『寺社調』の内容が抄出されている。

¹⁰ 近世の国分平野とその周辺にあった寺院調査は以下の卒業研究として実施された。岩下富美代：龍昌寺と廃仏毀釈—国分地区の廃寺調査より—(第一工業大学平成 30 年度建築デザイン学科卒業研究論文)

¹¹ 薩藩叢書刊行会：新薩藩叢書(四)、歴史図書社、1971(「南浦文集卷之上」)

¹² 「(二) 国分新府記、大隅故州国分新府、路通日向地接薩摩 襟清水而帶大津、(略) 慶長六年辛丑夏之仲、龍伯尊君相攸鑿山通江以欲宮府第於此地、(略) 去歲甲辰八月遣佐多宮内少輔忠増公遠至洛陽、扣陰陽博士正五位上賀茂朝臣在信公之室而問其地之*否、在信修鎮地鎮宅之秘法、坐措府第之四維於泰山之安、加焉為尊君祈身宮康健祝寿算綿延(略) 予觀夫新府勝狀、東西之衢其數九者蓋象于陽數也、南北之陌其數五者蓋象于五行也、(略) 慶長十年乙巳春三月廿四日」

¹³ 忠恒は島津家 18 代当主・初代薩摩藩主の島津家久。

¹⁴ 石川稜・宮本卓：国分麓の研究—風水に着目した首里・福岡との対比(第一工業大学平成 30 年度建築デザイン学科卒業研究論文)

¹⁵ 義久が詠んだ伊呂波歌は旧記雑録卷五十五にある。本稿では、霧島市教育委員会発行の小冊子『島津義久いろは歌』(解説：末増吾氏)の訳を引用した。

¹⁶ 近衛信尹は近衛家 18 代当主で、薩摩に配流されていた頃は信輔と名乗っていた。後の寛永の三筆の一人。義久は信尹の父である近衛家 17 代当主・前久(1536~1612 年)より古今伝授されている。

¹⁷ 信尹の日記である『三藐院記』の中の文禄 5 年 7

月 10 日~22 日の記録。

¹⁸ (慶長 10 年)「二十五日乙丑、是ヨリ先キ、家康、医師祐乗ヲ遣シ、島津義久ノ病ヲ問ハシム、是ニ至リ、書ヲ義久ニ與ヘテ、其平愈を謝スルニ答フ」(「長楽寺文書」(東京大学史料編纂所大日本史料総合データベース、12 編 3 冊))

¹⁹ 三ッ石友三郎・鹿児島県隼人町編集：隼人郷土誌、隼人町役場、1985

²⁰ 貴久は天文 17 年(1548 年)正八幡宮(正宮)を守らんとし、天文 20 年御尊体を正八幡宮に遷宮。永禄 3 年(1567 年)正八幡宮御社造営。(上注書ほか)

²¹ 注 10 の研究では、31 カ所の寺院をリストアップし、その内 17 カ所ほどの跡地を看板等により確認した。どちらも半数程度に義久との繋がりがあった。また、特に多い宗派は曹洞宗と真言宗であった。

²² 『寺社調』によると弥勒院の御免地は 331 石。以降で取り上げる義久が国分に建立した金剛寺は 53 石。

²³ 注 3 の書籍にある「台明寺文書」(抄目次番号 15)。なお、『三国名勝図会』の台明寺の箇所によると、台明寺の宗派は、法相宗、天台宗、真言宗を経て享保 11 年に天台宗に復されている。

²⁴ 小和田哲夫：呪術と占星の戦国史、新潮社、1998

²⁵ 歌 6 は義久の祖父・島津忠良が詠んだ伊呂波歌の以下が下敷にされたと考えられる。「聞くことも又見ることもころがら みな迷ひなりみなさとりなり」

²⁶ 河原洋子：国分の郷土史料・國府新城縄引帳について—城山公園における縄引の再現—、第一工業大学研究報告、第 30 号、pp. 59-65、2018

²⁷ 図 1 は国会図書館デジタルライブラリーより転写(三国名勝図会、60 卷. 11(卷之 31-33)、40 コマ)。

²⁸ 「服部日記」は注 3 の書籍にある。原物の写真は以下である。河原洋子：国分の郷土史料・服部日記—史料の紹介と作成背景の考察—、第一工業大学研究報告、第 29 号、pp. 93-98、2017

²⁹ 現地看板(平成 3 年 10 月国分市教育委員会)

³⁰ 金剛寺跡の三重の塔が西向きであるように、義久が生前に建立したと言われる京都の泉涌寺の墓石も、2019 年 3 月に確認すると同様に西を向いていた。

³¹ 岩下富美代・河原洋子：廃仏毀釈により廃寺となった国分龍昌寺について—寺院跡地の現地調査を中心に—、日本建築学会九州支部研究報告、第 58 号、pp. 685-688、2019

³² 写真 2 は第一工業大学自然環境工学科教授田中龍児氏によりドローンで空撮(2018 年)されたもの。

³³ 図 2 の地図は平成 20 年 3 月作成霧島市基本図 15。